



一晩中降っていた雪がやむとびっくりするほど青い空が顔を見せた。いまはまだ冬本番というわけではないが、冬の国ではもう秋の終わりを感ずる。駆け足で冬が近づいてきているのだ。

そんななか目の覚めるような青空がのぞいた。

空気は冷たく、できれば暖かい布団からはでたくはない。いや、事実絶対出たくはないのだが、それでもこれならば表に出ようかという気分にもなる。それくらいの青空だった。

それが勇者と一緒にの遠出であればなおさらだ。

「デートだ」

前に行く勇者には聞こえないようにつぶやいてみる。

だらしなない笑みがこぼれるのを自分でも止められない。

「デートだ。勇者と、二人で、街まで、買い物。ふふふふ」

「おーい。なにぼんやりしてるんだよ」

「なんでもないぞっ」

わたしは答えると、勇者に追いつこうと小走りに移動する。

今日は本当に素晴らしい日だ。

転移で移動した先はまばらに生えた白樺しろかばの林の中だった。間伐かまぼされているのだろう。人の手が

はいつてる証拠である。そのことから、この林が目的地の近くであることはすぐ分かった。

「もう氷の国か？」

「ああ、すぐだよ」

勇者は振り返って、足下の雪を踏み固めてくれる。

まだ正午にもならない日差しが稜線から差し込み、勇者の表情を逆光の中に溶け込ませた。見えないその表情に、わたしの胸はちくりと痛み、追いつくために焦ってしまう。

勇者はわたしのモノで、わたしは勇者のモノ。その契約は本当だ。

長い間焦がれ続けてきた相互所有契約。でもだからといって互いのすべてを直ちにわかり合えるわけではない。

だからこんな時には、なんだか焦るような、むずむずするような気持ちになる。

嬉しいのは本当だ。

勇者と共に過ごす時間はいつでもわたしの喜びで、こうして二人っきりで出かける遠出ともなればそれはひとしおというもの。

でも、それでも、融とけあえるわけではない。

勇者に優しくされると、なんだか奇妙に胸のうずきと寂しさを感じるのはなぜだろう？

逆光の中で影となった勇者は、きつと微笑んでいるけれど、それがもどかしくて、すこしだけ切ない。

「さら。いこうぜ。すぐにつく」

「うむ。もちろんだ」

わたしは勇者の横顔を見上げて歩き出す。

勇者とふたりで林の中の小道をたどり、到着したのは氷の国の首都、羽弦うづなの都だった。どこからかフィドルの調べが流れている。

吟遊詩人の都だけあって、こんなに寒くても、空が輝けば演奏をする楽士がいるらしい。城壁の外は雪景色だった。メイド長を残してきた冬の国よりも、降雪がはやいのだろう。

「ああ、そうだな。っていうか、冬越し村は平地だけど、ここは山の中だからな」  
「そうなのか？」

「ああ。俺たちは転移魔法で来ちゃったけれど、冬に歩いてくるのは結構大変なんだぜ」  
「そうなのか。」

わたしの疑問に答えてくれた勇者も、そしてわたしも、吐き出す息が白い。  
でもそう言われてみれば、そんな資料を読んだことがある。

氷の国は南部を構成する四つの国の中でもひとときわ小さい国だ。

鉄の国から続く天綱山脈てんこうさんみづに抱きしめられるようにして存在する小国。あまりにも小さいその領地の中には、首都である吟遊詩人のふるさと、羽弦の都と、あとは本当にいくつかの村しかない。山の中にできた嘘のような盆地にある別世界。古謡にある緑の園にたとえられるほど穏やかな国だそうだ。

「——吟遊詩人のふるさと、だったっけ」

「ああ、そうさ。よく知ってるじゃないか」

「以前に資料で読んだだけだ」

「まったく魔王は真面目だな」

勇者がにっこりと笑う。

その笑顔で我知らず動悸どうきが加速してしまうのを抑えきれない。「それくらい当然だ」と胸を張ってごまかしたが、勇者は微笑んだままだ。連れ合いにと望んだのはこちらだが、いつもいつでもこんなに余裕がないと、恨みたくもなる。

「勇者」

「なんだ？」

「なんでもない。ただ呼んでみただけだ」

腹立たしさを込めて、その裾を握ってやった。

こちらだけが振り回される気分は、精神衛生上よくない。

しかし考えてみると、その精神衛生などといった経験をはじめたことなのだった。

別段自分が老成した性格だなんて思ったことはないが、勇者と一緒に過ごすと、なぜか色んな感情が抑制できない。

勇者に所有されて以来、喜びは深く、寂しさは鋭く、切なさは焦げつくほどになった。ふれあえると飛び上がるほど嬉しいし、勇者に避けられると悲しくて胸が痛くなる。我ながら小児的なものだ。二百年も生きてこの有様なことから、呆れてしまう。でも、呆れながらもそれが心地い自分があるのも事実なのだった。